

和辻哲郎

二条離宮の障壁画

二条離宮の障壁画

二条離宮をはじめて拝観したのは何時いつであつたか、はつきり思い出せない。しかし昭和の初めまでには幾度かあの数多い豪華な障壁面に親しみ、自分ではほぼ一定した格附けをあゝの障壁に与えていた。一口でいうと、桃山美術としては末流であり、余韻である。桃山時代の美術に特有な豪華な気分はなお保持されてはいるが、しかしああいう思い切った構図や華麗さを押し出して来たごうとう豪宕な、また奔放な精神は、ここではもう新鮮な活気を失い

去っているように見える。そう私は考えていた。従って私には、何となくあの障壁画を軽んずる気持があつたかも知れない。あの数多い画によつて出来ている宮殿装飾の全体を一つのまとまりとして受取ることや、その装飾の価値を世界的な水準に於て考えて見ることなどは、曾て念頭に浮んだことがなかつた。

しかるに昭和三年の秋、ヴェルサイユ宮殿の印象がまだ私の心に生々しく残っていた頃に、私は人を案内して、何の気もなく久しぶりに二条離宮を訪ねたのであつたが、一巡壁画を見て廻る内に、これは素晴らしいぞ、芸

術的にはヴェルサイユ宮殿にも負けないぞ、という気がしたのである。これは自分ながらも意外なことであつた。でその時から、二条離宮の障壁画を改めて見なおし、それに聯関していろいろなことを考えて見るようになった。

第一には、何故^{なぜ}そういう比較が念頭に浮んだかという問題である。

ヴェルサイユ宮殿と二条離宮とは、建築の様式から云つても、装飾のやり方から云つても、まるで違うものである。殊にその規模がまるで違う。ルイ十三世が建築家

のルメルシエーに建てさせたときには、なおルネッサンスの様式を保持した小ぢんまりした建築であったが、その後ルイ十四世がルヴォーやマンサールを使って、二三十年もかかって拡張工事をやったので、バロック盛期の宮殿建築として全ヨーロッパに範を垂れるというよう
な、壮大な宮殿になったのである。従ってそれはルイ王朝の美術の粋をあつめたということになるであろうが、革命の後にも、ルイ・フィリップが。この宮殿を国立美術館としていろいろ増補して行った。ドラクロアなどの壁画がはいったのはその時である。だからヴェルサイユ

宮殿は、十七世紀から十九世紀に亘る長い期間の記念物わたとしてわれわれの前に立っているのである。それに比べると二条離宮は、寛永の初めに、江戸の將軍の京都別邸として建てられたもので、ただ一時期を表現するに過ぎない。そこに注ぎ込まれた労力の量から云っても、この方は比較にならないほど少ない。

しかしそれにもかかわらず。この両者は性格を同じくしている。それらはいずれも、強大な権力を持った支配者の宮殿である。従ってそれらはいずれも、豪奢であることを特徴としている。悪くいえばそれらは成金芸術で

ある。のみならずそれらは、建造の年代をも同じくしている。ルメルシエーがルイ十三世の命によってヴェルサイユ宮殿の中核的な部分を建てたのは、一六二六年だといわれているが、二条離宮が作られたのも一六二五年の頃である。前者は十七世紀を通じての長期に亘る造営の出発点であり、後者は短期間に完成したものであるが、しかし一方で石工が営々として大理石を刻み上げていたその同じ時に、他方で木工が木を削りそれを組み上げていたのである。このように両者が性格と時代を同じくしているのであるならば、その様式がどれほど異なってい

ようとも、それを比較して見る理由は十分にあると云つてよいであろう。

第二に、どういふ点が比較の対象になるかという問題であるが、これほど様式の違ふ建築において、形とか、内部の装飾とかを、一々比較して見るということとは、殆ど無意味に近い。それはむしろ、ヨーロッパ風の石造建築の様式と、屋根の大きい東洋風の木造建築の様式との、一般的な比較論に所を譲るべきことであろう。ここで問題になるのは、異なつた様式の内部において、どれほどまでに芸術的統一が成就されているか、という点でなく

てはならない。二条離宮で、これはヴェルサイユ宮殿にも負けないぞと感じたのは、そういう点に着目してのことなのである。特に、宮殿内部の装飾としての壁画の効果について、その感じが深かった。

ヴェルサイユ宮殿の内部の装飾は、絵画のみに頼ったものではない。絵画よりはむしろ彫刻的、或は工芸的要素の方が勝っているであろう。壁面や欄間には、化粧漆喰によって精緻な文様が画かれて居り、柱や扉や家具などには同じように精緻な文様が刻み込まれている。絵画はそういう装飾のところどころに、人物画とか、戦争画

とかとして、嵌め込まれているだけである。そういう装飾は実に豪華であつて、二条離宮のように質素なものではない。しかしそれらを見て来てあとに残っている印象は、実に「装飾の過冗」ということにほかならないのである。どれか一つの室、或は二三の室だけで。何時間もぶらぶらしている、というような見方をしてくればよかつたのかも知れぬが、数多い間を次から次へと見廻つた印象だけで云うと、豪華は豪華でも、案外単調で、反つて人を退屈させる。宮殿全体から一つのまとまつた印象を受けることが出来ない。つまり芸術的統一がないので

ある。

それに比べると、二条離宮は、部分的には質素であつても、一つのまとまつた全体としての印象を与える。もとよりここでも、絵画のみが装飾ではない。襖ふすまや長押なげしの金具や、極彩色の格天井ごうてんじょうや、すべてみな、日本の普通の住宅建築に見られないような豪華なものである。しかしこれらの装飾要素は、すべてその室の障壁画の気分に服属し、その統制に従つたものである。だからどれほど絵画以外の装飾要素があつても、絵画が主導的な要素として全体を統一している。これは絵画の様式とも関聯

した問題であるかも知れぬ。ヴェルサイユ宮殿では、壁面を文様で飾ろうとする時には、全然絵画と独立した化粧漆喰の文様を以てしている。従って絵画を以て飾ろうとする時には、装飾文様的な要素の全然ない人物画の類を以てしている。両者は全然分れているのである。しかるに二条離宮の壁画は、樹木や草花を描いた半ば装飾的な絵画であつて、両者の役目を兼ねつとめることが出来る。だから襖や壁は、悉く絵画を以て埋められているのである。これが宮殿内部の装飾に鮮やかな芸術的統一を与えた所以ゆえんであるかも知れない。

しかしそれのみではない。私はヴェルサイユ宮殿の内
部装飾において、一つの統一した芸術的意図を感受する
ことが出来なかった。しかるに二条離宮においては、実
にはつきりとそれを感受することが出来たのである。こ
れは一つの芸術的作品として重大な問題と云わなくては
ならぬ。

二条離宮におけるこのような芸術的統一を明かにする
ためには、簡単にでもあの障壁画の並び方を叙述しなく
てはなるまい。

二条離宮は大体において三つの部分に分れている。第一は玄関のある一棟で、そこに遠侍の間とか大広間とかがある。大広間は將軍の謁見所であつて、諸大名などと公式に逢う場合にここを用いたらしい。第二はここから鍵の手に折れた先にある一棟で、第一の棟よりは少しく小さいが、しかしここにも控の間や広間があり、第一の場合ほど儀式張らない客を受けたのである。第三は更にここから鍵の手に折れた先にあつて、第二の棟よりもっと小さいが、そのうしろに一層小さい棟があつて廊下でつながっている。ここは將軍の居間や寢室として用

いられたらしい。

さてその第一の部分であるが、玄関からはいつて先ず^まぶつかる遠侍の間は、七十六畳ほどの室で、金張付の襖に、大きく竹に群虎が描かれている。相当に広い壁面であるが、ただ数本の竹の幹と、相呼応する数匹の虎とで、人を威圧するような気分を室中に漲^{みなぎ}らせているのである。その次は大広間の三の間に当る室で、広い襖の金地の面が、ただ一本のうねった松の幹によって占められている。その次の二の間も同じである。更に裏側の檜の間も同じで、壁面は実に広いが、そこにただ一本の大きい

松が描かれ、その枝は実に五間位ものびている。が特に二の間の松の絵は、非常に雄偉な印象を与える。これは探幽作と伝えられているが、その真偽はとにかく、二条離宮の障壁画中最もすぐれているといわれるのも無理はない。一本のうねった松だけで、これだけの広い画面を、一分の隙もなく引き締めている手腕は、確かに見事である。こういう絵は、画面をさまざまな形象によって埋めつくさなくては承知の出来ない立場から見ると、或は空疎なものに見えるかも知れない。ヴェルサイユの宮殿でならば、これだけの広い画面には、何十人或は何百人も

の人物がさまざまの姿態を以て描き込まれるのが常であるが、ここではただ一本の松が描かれているだけで、画面の少なからぬ部分が空白なのである。しかしその一本の松の幹や枝は、何も描かれていない金地と相呼応して物を云っているのであって、もしその空白がさまざまの形象によって充たされるならば、その幹や枝のうねりは効果を示さなくなるであろう。吠えている虎の姿よりも、うねった松の幹の方が、一層強く威圧的な気分を現わしているのは、何も描かれていない金地があるからである。と共に、何も描かれていない金地は、うねった幹のお蔭

で、非常な表現力を發揮している。空疎に見えるどころではない。

が松の絵の効果はそれだけに尽きるのではない。雄偉な松に飾られた二の間から、いよいよ、大広間を見渡すと、同じような老松の姿が更に広大な壁面を覆うているのに驚かされる。これまで見て来た松の絵は、つまりこの画因の展開に外ならなかったのである。正面にある上段の床の間の壁には、丁度そこに工合よく嵌まるような松が描かれ、その枝が右手の違棚ちがいだなの壁にも及んでいる。右側の長い壁面は、奥の方の帳台飾りのついた重々しい

襖から、下の方の金地の襖に至るまで、一本の老松を描いた一つの画面になっている。横に長い画面であるにかかわらず、幹はただ一つで、それがうねって、遠くまで枝をのばしているのである。葉は深緑で美しく、梢は欄間に及んでいる。この大きい松の絵を眺めると、床の間の松がこの曲りくねった松に展開し、更に二の間、三の間などのヴァリエーションに展開して行く所以が、実に鮮やかに心に映ってくるのである。

この大広間は、障壁画以外の装飾にも豊かである。違棚は凝ったものであるし、帳台飾りも豪華である。天井

は格天井で、縁は黒塗り、その間に群青ぐんじょうや金の色彩が見える。欄間には彫刻があり、飾り金具も多い。しかしこれらの装飾は、皆壁画と調子が合うように作られている。壁画が全体の気分を支配するように構想されているのである。その気分は、竹に群虎とか、太い松の幹のうねりとかで示されているように、豪宕と形容してよいようなものである。それは威圧的な力強さを印象する。これこそまさに二条離宮の装飾を考えた芸術家が意図したところなのであろう。

第一の部分にはなおそのほかに勅使の間がある。これ

は入口の遠侍の間や、三の間の裏の檜の間などの、背後にある。見物の時には、廊下をぐるぐる廻って離宮全体を見終つて後に、最後にこの室の前に出たと思うが、実際は右に叙述した室々と相隣っているのである。だから、勅使の間として遠侍の間や大広間と扱い方を異にしているにもかかわらず、第一の部分に属するものとして、同じ気分のもとに統一されている。画題は、上段の間にかえで楓の樹、二の間にもみ縦の樹をえらんで、表側よりもずっと穏やかであるが、しかしその縦の樹などは、太い幹を直線的に並べたものであつて、非常に強い威圧するような印

象を与える。私は最初この画に面した時に、その構図の新鮮な味に驚いたものである。明治以後の展覧会向きの屏風画ではこの種の構図は珍らしくないが、しかし江戸時代初期のものには全然期待していなかったハイカラなところがこの画には現われている。二条離宮の障壁画全体から見ても、画面を太い線で縦に直線的に区切るようなやり方は、遠侍の間の竹と、この間の縦だけである。しかもこの縦の樹は、竹よりもずっと太いし、また虎などのような他のものをあしらってもいないし、ずっと思いついた構図である。第一の部分を一つの気分に統一し

ようとする芸術家の意図は、こういうところにもはつきりと現われているのである。

さて第一の棟から第二の棟へ渡って行く廊下に面して、細長い室があるにはあるが、こここの壁画はひどく摩滅して、目につくものはなかったと思う。その廊下を行きついた先に、第二の棟の廊下へはいる杉戸があつて、それに草花の絵がある。おやと思ひながら杉戸をはいてふりかえると、杉戸の内側には、華やかに咲きあふれた桜の花が描いてある。尚信なおのぶの筆と伝えられているが、

それを見た瞬間に、一挙にして気分を転換させられるほどの、力のあるものである。

桜花の絵によつて、和^{やわ}らかな気分させられたものの眼前には、先ず取っつきの三の間の襖の絵が展^{ひら}ける。

それはどこかの浜辺にでもありそうな、遠見の松林の風景である。松を画題とした点において第一の部分と密接につながっているが、しかしその松は、第一の部分のどこにも見られないようなやさしい姿で、壁画の一部分に、小さく、何十本となく並んで立っている。いかにもなごやかな感じで、威圧的な気分はどこにもない。第一の部

分と異なつた気分は、この松林の絵だけでも十分に醸し出される。かも

がそこを過ぎて二の間の前へ出、上段の間までを一目に見渡したときには、われわれは実際にあつと驚くような気持になる。上段から二の間へかけての横に長い壁画が、爛漫と咲き乱れた桜の花に充たされていて、実に華やかなのである。華やかなだけでなく、艶めかしささえも感ぜられるように思う。

尤も、上段床の間の壁画は、桜花ではない。ここでも松である。しかしその松には雪が積もつて居て、松の葉

の濃い緑をひどく際立たせている。のみならず側には濃
 艶な紅梅を添え、ひよどり 鶉、しじゅうから 四十雀などがあしらってある。
 斜下からは、盛上彩色の雪の積もった柴の垣根が出て、
 松と交叉している。しかもこの垣根は右手の違い棚にま
 で及んでいるのである。

そういう松の絵であるから、桜の花と調子が合わぬ筈
 はない。違い棚のすぐ右側の帳台飾りには、梢が欄間に
 届くような大きい桜の木を描いている。桜花の絵はそこ
 から始まって壁面を埋め、二の間の襖にまで及んでいる
 のである。そうして二の間では、盛上彩色の網代垣あじろがきに沿

うて、厚ぼったいような八重桜の花が、ほとんど艶めかしいほどに描き出されている。

第二の部分はこういう仕方で優美な感じを全体に漲らせるように装飾されている。格天井の文様でも、飾り金具の文様でも、皆それに調子を合わせたものである。が特に強い印象の残っているのは、裏廻りの室の襖の絵であつた。そこは細長い室で、襖の数は非常に多かつたと思うが、それが悉く華やかな花の絵によつて飾られているのである。けしの花なども並んでいたように思う。こういう草花の絵は日本では少しも珍らしいものではない

が、しかしこれほど広い画面に一面に花のみを並べると
いうやり方は、ほかにはあまりないように思われる。構
図も中々ハイカラで、こましやくれたところがない。草花
だけによってあれほど広い画面をひきしめ、あれほどの
効果をあげるといふことは、やはり驚くべきことである。

第二の部分で右のように華やかな優美な気分にはいたり
ながら、更に廊下を伝しやうしやつて第三の棟に移ると、急に色彩
が少なくなり、瀟洒な気分が支配しているのに出逢う。
ここでも気分の轉換に一寸驚きを感じさせられる。

ここでは上段の間も狭く、十五畳位になるが、床の間の壁や仕切りの襖には、墨色を主にした唐絵の山水が描かれている。筆者は興以だといわれているが、絵は中々立派である。特に帳台飾りの襖絵が傑すぐれている。山や水や台閣などを墨線で描き、それに淡彩や金泥などを用いているのである。色彩がないわけではないが、前の極彩色の花の絵との対照で、すっかり色彩を離れたような気持になる。袋戸に小さく紅白の撫なで子が描かれているが、その色彩がひどく目立って感ぜられるほどであるから、襖絵の淡彩の色調はよほど弱いのであろう。

この部分では、二の間三の間もあまり大きくなく、十
八畳位で、同じように淡彩の山水や人物が描かれている。
四の間はさらに小さく十二畳位で、襖には雪竹に睡雀を
配した絵があった。これは純然たる墨絵であったように
思う。とにかく全体の気分はあっさりとしていて、閑寂
の境地に近づこうとしているように見える。

以上によって二条離宮の三つの部分がどういう風に装
飾されているかはおおよそ見当がつくことと思う。三つ
の部分はそれぞれに全然異なった気分によって統一され

ているのであるが、第一の部分の威圧的な力強い感じから、第二の部分の和やかな濃艶な感じに移った場合、さらにこの濃艶な感じから第三の部分の枯淡な瀟洒な感じに移った場合、われわれは実に愉快な驚きを感じずる。それらはそれぞれに全然異なった気分でありながら、互に照応し、映発し合って、一つの緊密な統一を形成しているのである。そういう統一の仕方をわれわれは、連歌や俳諧の附合つけあいにおいても見出すことが出来るであろう。私は二条離宮の内部装飾を誰が指揮したのであるかは知らない。またあの時代のこの種の創作に、誰かが指揮を

するといふようなやり方をしたのであるかどうかとも知らない。しかし作られたものには明白に右のような統一が実現されているのである。もし連歌式の統一が意図されていたとすれば、誰か一人が指揮しなくともああいう統一は実現され得たであろう。連歌や俳諧は指揮者のいない共同製作であり、従って個人の製作ではなくして、根本的に団体の製作である。私は二条離宮の内部装飾が、右のいずれのやり方によつたものであるかを知らない。がとにかくあの全体の統一は中々すぐれたものである。個々の部分の絵が一流の傑作とはいえなくても、あの全

体は、宮殿の装飾芸術として、現存の遺品中最も傑出したものと云ってよいであろう。

桃山時代の宮殿は悉く亡んだ。断片的に残っているものはあるが、一つの宮殿として有機的な統一を保ちつつ保存されたものは、一つもない。二条離宮は桃山時代の芸術の名残なごりを示すに過ぎないが、しかしわれわれはそれによって桃山時代の宮殿の豪華な姿を想像することが出来るのである。そうしてその想像の枢軸となるものは、右にいったような全体の統一にほかならないであろう。

この点に注目すれば、二条離宮をヴェルサイユ宮殿に

比較して見るといふことも、まんざら意味のないことではないといふ気がする。様式はまるで違ふのであるから、ヴェルサイユ宮殿で見られると同じ美しさを二条離宮に求めたところで得られるわけではない。しかし異なつた様式によつて作り出されるそれぞれの美しさを追うて行けば、芸術的にいづれが一層成功しているかを比較して見ることには出来るのである。その際必要なのは、様式が異なるに従つて、それを眺める眼鏡の度を合わせ変へるといふ用意である。一つの様式にだけ度を合わせて置いて、そのままではかの様式の絵をも眺めれば、はつきり見え

ないのは当然であろう。そういう人が、自分の用意の不足には気づかないで、この絵はぼやけていると主張する場合もなくはない。その人は主観的には正直であるかも知れぬが、客観的には嘘を云っているのである。

(昭和二十六年一月)

日本文学電子図書館

二条離宮の障壁画

著 者：和辻哲郎

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文学大系 40
筑摩書房

昭和48年2月20日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館